

☆メディアアート取材報告（大野祐介）

みなさんこんにちは。都立富士高校茶道部の大野祐介と申します。

一唐突ですが *abrupt question*

皆さんは「メディアアート」という言葉をご存じですか？ひとまず何かしらのアートである、ということをご理解頂けると幸いです。さらに昨年 8 月のリオ五輪の閉会式で行われた複雑な光と映像を組合せ最後に地球の反対側から安倍首相が飛び出したパフォーマンスもその一つ、と申し上げればほとんどの方に共通のイメージを持っていただけるのではないのでしょうか。今回は先の作品を制作されたアートグループである「ライゾマティクスリサーチ」の作品を見学し、東京は新宿の NTT インターコミュニケーションセンター (ICC) へ行って参りました。

一出会い *encounter*

私が拝見したのは〈distortion〉という作品です。芸術作品を敢えて無理をして一言で形容するならば「光の舞」とでも申しましょうか。白い床の上に人の背丈ほどの鏡張りの直方体が 5 台、コンピューターに制御されて限られたスペースの中を自由に、しかし統制を保ったまま動き回り天井からの赤・青・緑の 3 色が持つ要素を組み合わせ変幻自在な光と動きの世界を生み出していました。

もう一点、その隣に「アート+コム」という別の団体の「RGB|CMYK Kinetic」という作品も展示されていました。こちらは天井からつるされた 5 枚のドーナツ状のディスクに赤・青・緑の光を投射し、これまた自由に、そしてまとまりを持って動くディスクによって光と影が織りなす世界を展開していました。

一ひらめき *inspiration*

この二つの作品を見て私はいくつかの共通点を見つけました。まずどちらも音楽に合わせて動きを表現していたこと、そして光と一見法則性が掴めない動きによる反射や影の世界が生まれていたことです。中でも私は「動き」という観点に注目しました。どちらの作品も最新の技術と発想によって創り出された時代の先端を行く作品です。しかし私はそんな作品の中に新しさとともに何故か懐かしさを感じていました。そしてその正体を見破るべく様々な角度から作品を眺め回してみたところ、やがて動き回る影の中に、いつの日か頭を噛まれた記憶のある獅子舞や、長崎くんちのような動きが浮かんできたのです。こうした伝統芸能の動きは自然をモチーフにしている例を多く聞きます。そう考えてみると今まで見つめていた作品の動きにも「人の手による動き」といった印象は感じられず、風や水の流れに身を任せる草花のような動きを感じました。こうして私は「どんなに新しいものでもそのどこかには受け継がれてきた伝統のエッセンスが隠れている。何から何まで新しいものなんてないのだろう」と納得し満足したのでありました。

一会心の一撃 *Kaishin-no-ichigeki*

作品を拝見した後、ICC の学芸員をされている畠中さんとお話する機会を頂き、先ほど

の感想を申し上げたところ予想だにできなかったお言葉を頂きました。それは「表現されていたのは動きだけでなく、音楽も含まれていた」ということです。私はこの発想にこの2017年(1/22 取材時点で)最大の衝撃を受けました。畠中さんは「音楽に合わせた動きをしているのではなく、音楽を動きで表現しているのではないか」と考えていらっしゃいました。晴天の霹靂とはまさにこのこと、1本の光に体をまっすぐ差し貫かれた思いでした。私は目に見えるものを気にするあまり、空間としての作品を捉えきれていなかったのです。音はふつう聴覚として感じることはできますが、それを敢えて動きとして視覚で捉えてみるということに全く考えが至りませんでした。そしてそこにまた別の新しさを感じたのです。

一目覚め *awakening*

私は、音楽を単純な動きを目で見て感じるといういわば「五感への挑戦」ともいうべき行為に憧れにも似た興味を持った、いや持たされてしまったのです。本来なら専門の器官がある対象を別の器官で感じる、新たな感覚の世界の入り口に案内されてどうしてじっとしていることができますでしょうか。もちろん私は週に数回茶道のお稽古をしているだけのごくごく普通の高校生ですから他人の感性を揺さぶるような芸術作品を手掛けることはできません。しかし私たちの持っている五感に代表される感覚にはまだ活用していない領域が果てしなく広がっていることに気付くことができたのはとても大きなことだと思います。自分の世界はまだまだ拡張できるということ、そしてそれを広げてゆく喜びをもっともっと味わいたいと強く思いました。そしてこうして1つの作品を自分や他人の感性を共有して様々に解釈することの面白さも感じました。

それでは早速ですが、先ほどからパソコンの横に置いてある、視覚によって「赤い三角錐状の立体」として認識しているイチゴを味覚で感じてみようと思いますので、今回はこの辺りで失礼いたします。